

Ⅲ 児童、教職員

1 児童数 (平成21年 5 月 1 日現在)

学 年	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	合 計
男 子	35	35	36	34	36	30	206
女 子	40	40	39	43	36	37	235
合 計	75	75	75	77	72	67	441

2 居住地域 (平成21年 5 月 1 日現在)

校区 人数	鳥 取 市																	岩 倉 合				
	東	西	南	北	江 山	高 草	湖 東	湖 南	桜 ヶ 丘	中 ノ 郷	国 府	福 部	気 高	鹿 野	青 谷	河 原	用 瀬	佐 治	美 郡	頭 郡	吉 市	計
男子	4	11	29	24	4	33	65	3	12	11	4	0	3	0	0	0	0	0	1	1	1	206
女子	6	10	54	23	2	43	68	3	16	4	1	2	1	1	0	0	0	0	0	1	0	235
合計	10	21	83	47	6	76	133	6	28	15	5	2	4	1	0	0	0	0	1	2	1	441

3 通学状況

区 分	バス通学	列車（東）	列車（西）	徒歩通学	計
人 数	231	43	28	139	441

4 職 員

職 名	氏 名	担 当	研究 教科	職 名	氏 名	担 当	研究 教科
学校長	小枝 達也	／	／	養護教諭	米嶋美智子	養 護	養護
副校長	上島 和彦	書 写	道徳	講 師	デボラ増井	英会話	／
教 頭	長石 彰	書 写	国語	講 師	天野佳代子	司 書	国語
主 幹	妻藤 純子	図 工	図工	講 師	谷口 幸子	家 庭	家庭
教 諭	谷田 順子	1-1	生活	講 師	山川 静	図 工	図工
教 諭	新 康江	1-2	生活	講 師	福井 洋子	1年副担任 英会話	英会話
教 諭	漆原 文彦	2-1	算数	学校医	滝田賀久也	内科医	／
教 諭	上田 育子	2-2	英会話	学校医	庄司 眞喜	耳鼻科医	／
教 諭	田中 和幸	3-1	体育	学校医	元村 嘉男	眼科医	／
教 諭	松本 寿子	3-2	算数	学校医	大草 了	歯科医	／
教 諭	水本 浩二	4-1	理科	薬剤師	米山美奈代	環 境	／
教 諭	木原 一彰	4-2	道徳	事務長	西尾 勝		／
教 諭	本田 暢彦	5-1	理科	係 長	金田 泰雄		／
教 諭	谷田 健司	5-2	社会	事 務	岸本さゆり		／
教 諭	金澤久美子	6-1	国語	事 務	山本 由美		／
教 諭	新家憲一郎	6-2	社会	栄養教諭	下坂なつえ		／
教 諭	桝田 祐子	専 科	音楽				

Ⅳ 教育研究

1 研究の歩み

- ・学びとる子どもを育てる学習指導（1975～77）
- ・子どもの問いと教師の問いかけ（1980～82）
- ・自立する子ども（1983～86）
- ・個性を育む授業の創造（1987～89）
- ・自ら学ぶ子どもを育てる授業（1990～92）
- ・子どもが楽しくわかる授業（1993～95）
- ・生きる力を育てる学校（1997～99）
- ・未来を拓く小中一貫の新教育課程
～教科・総合・特活のあり方を求めて～（1999～2001）
- ・未来を拓く小中一貫の新教育課程 一文部科学省指定
～評価を生かした学習のあり方～（2002～2003）
- ・学ぶ意欲を高め、実践的な行動力をもった児童・生徒の育成
～かかわり合う力、適切に判断する力、自分を生かす力を培う
小中一貫教育のあり方～（2004～2006）
- ・学びを創り楽しむ授業の創造（2007～）

2 本年度の研究～小中一貫教育の推進

学びを創り楽しむ授業の創造

～授業づくりの視点からみる連続した学び～

一昨年度より、「学びを創り楽しむ授業の創造」という研究主題を掲げ、子どもたちが主体となって「学び」を創り出し、「学び」を楽しむ授業を追究している。昨年度は「授業づくりの視点からみる連続した学び」という副題にあるように、小学校教育と中学校教育における学びの連続性について授業づくりの視点で見直しながら、小・中学校で連携して本校のめざす授業についての研究・実践を行ってきた。授業づくりの視点を「教材開発」「授業構成」「支援のあり方」「学習したこと活用の活用」の 4 つに集約するとともに、「学びを創る」「学びを楽しむ」という子どもたちの様相について教科・領域の枠を越えた研修をもちながら、研究を深めてきた。



そこで今年度は、昨年度・一昨年度にわたって各教科・領域部会で独自に問い直してきた学びの連続性を、各教科・領域の「授業づくりの視点」からみることによって、本校のめざす授業を日々の実践を通してさらに追究していきたいと考えた。また、本年度より移行期に入った「新学習指導要領をふまえたカリキュラムの構築」、昨年度から取り組んでいる「幼小連携」も視野に入れながら研究を進めたいと考えている。

なお、三年次の研究発表大会は平成 22 年 7 月に開催予定である。